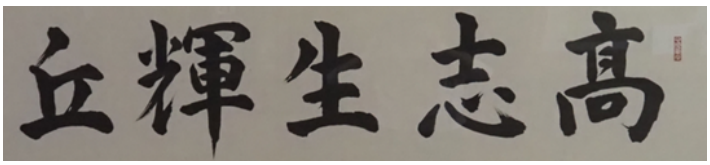
豊丘中学校学校だより　「高志輝丘に生ず」　書　毛涯章平先生



令和7年度第13号
3月17日

HPもごらんください

3月

３年生ありがとう　生徒会三年生を送る会

フラワーアーチの中を３年生の入場

３年生の歌とメッセージ

１，２年生のステージは笑顔を誘います

受験を終えた３年生に楽しんでもらおうと「３年生を送る会」が行われました。常に見本であり、憧れの存在であった３年生へ感謝とエールを後輩から送りました。１年生も気がつけばずいぶん大人びて周りを楽しませる明るく仲の良い学年になりました。２年生は、この会で新生徒会の存在感をしっかりと見せてくれました。

３年生からは、元気な笑い声と歓声が何度もあがっていました。３年生の出し物は、素敵な歌と先生たちや後輩に向けてのメッセージ。３年生にとって、友達と笑い合える時間をなごり惜しむかのような温かな時間となりました。

明日は卒業式、私たちは豊丘中学校の顔となって引っ張ってきてくれた３年生の卒業の姿をしっかりと目に焼きつけたいと思います。

それぞれの学年がクラスマッチを楽しみました

毎年この時期は、学年クラスマッチが行われます。１、２年生はバスケットボールをクラスマッチ形式で楽しみました。

３年生は、受験を終えた解放感に浸る１日となりました。今年の３年生は、クラスマッチでなく、「スポーツフェスタ」として百人一首やソフトボール、バスケット、バトミントン、卓球などのレクレーションを楽しみました。

こうして、３年生にとって一つ一つのできごとが「中学時代の思い出」になっていくのですね。

３学期　終業式　校長講話
「絶望と悲哀と寂寞とに耐え得らるる勇士たれ」

今日は、毛涯章平先生についてお話します。大正１２年生まれ2016年に亡くなりました。私は、毛涯章平先生の最後の教え子です。中学校時代3年間、毛涯章平先生が校長先生でした。

校長講話で、いろいろなお話をしてくださって、私は今でもそのお話のいくつかをよく覚えています。

毛涯先生は、豊丘村に住んでおられて豊丘村の教育委員長もされていました。いくつかの本も書いています。この中の『ふきのとうの餞別』だけは、なぜか大学時代からに手元においてありました。私は、大学の4年生のころ「先生になるんだ。」と決めたのですが、この本がなかったら先生になっていなかったと思います。「ふきのとうの餞別」をもう一度読み返し、涙を流しながら「やっぱり先生になろう」「毛涯校長先生のようにはなれないけれど先生になりたい」と強く決意したことをよく覚えています。

こんな私ですから、この豊丘中学校の校長になることが決まった時に真っ先に思ったことは、「毛涯校長先生の村の校長先生になるんだ」ということでした。ものすごく緊張をし、畏れをいだいたことを覚えていますし、それは今も変わりません。

さて、この石碑を知ってますか？本校の中庭にあり、校長室の窓を開けるといつも見えます。なんて書いてあるか知っていますか？「絶望と悲哀と寂寞（せきばく）とに耐え得らるる如き勇者たれ」と書いてあります。毛涯先生が揮毫されたものです。

今日は、毛涯先生がこの言葉を書いたきっかけとなった校長講話を著書『肩車に乗って』から朗読したいと思います。私は、この校長講話を中学生時代に聞きました。今でもよく覚えています。

「ここに勇者あり」

3年生。よく聞け。

当校の最近の卒業生でA高校を受験して、ただ一人不合格であった少年がいます。先生方もお友達も、もしかしたら本人も絶対に大丈夫だと思っていた。それが不合格であった。わたしも悲しかった。先生方も残念だった。まして本人の嘆きは察するにあまりあるものあった。 その少年が第二次募集でB高校へ進学した。そうして三年たった。

彼は、その三年間、決してへこたれることなく、悲観することなく、まさに臥薪嘗胆（がしんしょうたん）の３年間であった。「臥薪（がしん）」とは、あたたかいふとんでなく、背中の骨が痛いような薪の上に寝て、あの辛さを思い出すこと。「嘗胆（しょうたん）」とは、肝（きも）を嘗める。にがいにがい肝を嘗めて、あの時の残念な気持ちを忘れないように心掛けること。まさにその少年にとっては、三年間が臥薪嘗胆の毎日であった。

よくぞ、あの辛さを忘れないで頑張りとおした。そうして、今年、その高校から、よくやったというわけで推薦をされて、見事、文教大学教育学部に合格した。

彼は、四年後にはおそらく、すばらしい社会人となって、もしかしたら先生になって帰ってくるにちがいない。実にお見事です。

この先輩は、私が常に言う『どこの学校に行くかによって人間が決まるのではない。行った学校で、行った場所でどういう生き方をするかによって、人間が決まるのだ』ということの生きた見本です。

中には、せっかく高校へ行って、いく月かでもう挫折してしまって、退学してしまった人もある。意志の弱さといおうか、誘惑に負けたといおうか、そんな人間になってはいけないぞ！

一年生も、二年生も、あの先輩の悲しみに耐えて頑張りぬいた姿を手本として頑張ってほしい。やればできるのです。少しぐらい苦しいことや、成績がおもわしくないことがあっても、そんなことでへこたれちゃだめだぜ！！「いまこそ、『絶望と悲哀と寂寞とに耐え得らる如き勇者たれ」のことばを肝に銘じてほしい。

（講話では本文を読みました。ここは林が抜粋）毛涯　章平　著『肩車にのって』